
CHEER ? ~ 弥生 ~

LiN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHEER ?～弥生～

【著者名】

N6457Y

【あらすじ】

なんで我慢できなかつたんだろ？

？～弥生～

先生は僕に床を拭くよしに言った。

濡れたパンツがだんだんと冷たくなつていく中、僕は教室の後ろから雑巾をもつてきて、床のおしつこを拭いた。途中で目をあげると真由が黙つてぼくの横で床を拭いていた。

真由は僕の手をつなぎ、保健室へ連れて行つた。

保健の先生に替えるパンツが入つた袋を渡された。

保健室の隅で僕は濡れたズボンと、中に履いていた短パンと、それからパンツを脱いで、保健室のパンツを履いた。

ズボンはなかつた。

真由に手をつながれ、教室へ帰つてきた。

「先生も昔、授業中に我慢できなくてお漏らしをしちやつたことがあります。みんなも失敗しちやつたことがあるでしょう?」先生が言った。

「辻本君が今、どういう気持ちか、一人一人心の中で考えてみて下さい。からかつたりする人はいなつて、先生は信じてます。」

校庭へ向かう廊下に、教室移動をする下級生たちがいた。

みんなすれ違う時にぼくを見ている。

短パンを履いたクラスメイトの中で一人だけ保健室のパンツだけを履いた僕を見て、ある男子は驚いた表情を浮べ、ある女子は隣の友達とひそひそ話をした。

その中に、妹の葉月がいた。

「おにいちゃん・・・

葉月がつぶやくのが聞こえた。ぼくはそれ以上葉月の驚いた顔をみ

ていられなくて、その場から足早に靴箱へと向かつた。田の奥がツンと熱くなつた。

帰りの会が終わつて、僕はまだ教室に残つていた。

クラスメイトが一人、また一人とちりつと僕を見た後に教室を出で行く。

うつむいた僕の田に、保健室で借りた白いパンツの端が映つている。何度見直してもやつぱり、僕はズボンを履いていなかつた。僕は座つたまま振り返つて後ろ側を見る。ぱんつのお尻は、校庭の砂で黄色く汚れていた。

こんなふうになつちやつてたんだ・・・

また泣きそうになつてしまふ。いやだ、もうみんなの前で泣きたくない。

なんで授業の前にトイレに行かなかつたんだろう。

なんでトイレに行かせて下さいって言えなかつたんだろう。

なんで次が体育だからってズボンの下に短パンを重ね履きしちやつたんだろう。

なんで我慢できなかつたんだろう。

なんでみんなの前でお漏らししちやつたんだろう。

帰り道、ぼくは学校から出てまっすぐ家へと向かつた。

校門を出る時、みんながまじまじと僕を見ていた。

家に帰るまで、また誰かと会うんだろうか・・・

帰つたらお母さんに何て言おう・・・

「弥生、パンツ丸見え。」

突然後ろから声がした。

僕はとつさにお尻の汚れた部分を隠した。真由がいた。

「こんなことで嫌いになつたりしないから。」

月村はそう言って僕の手をとつた。

ほどなく、反対側の手が握られた。葉月がいた。

「かえる。」

二人は僕をぐいぐいと引っ張っていく。

両手をつながれているので、一粒こぼれた涙を拭うことはできなかつた。

？彌生（後書き）

こちらは過去作に大幅加筆です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457y/>

CHEER ?～弥生～

2011年11月19日21時38分発行